

「芋煮でケンカしてんじゃねーよ」

—修正稿—

初稿：さいの

修正：しののめ

2026/10/14

〈人物表〉

菅原 春奈 すがわら はるな (37) 陽介の妻、宮城出身

菅原 陽介 すがわら ようすけ (39) 春奈の夫、山形出身

菅原 日向 すがわら ひなた (6) 春奈の息子

菅原 淳 すがわら あつし (66) 陽介の父

早乙女 浩介 さおとめ こうすけ (41) 陽介の兄

陽介の親族ら

1. 東北新幹線（朝）

新幹線、走る。

2.

東北新幹線・車内（朝）

菅原春奈（37）と菅原陽介（39）、三列シートに掛けている。

菅原日向（6）、二人の間に座っている。

新幹線のオモチャで遊ぶ。

春奈

「え……？ 何の話？」

陽介

「言ってなかったっけ？ 今日は芋煮会（いもにかい）だ
って」

春奈

「聞いてないよ。普通に実家行くんじゃないの？」

陽介

「いや、近くの河川敷で飲み食いしようって、親父が。結婚する前は親戚でよくやってたんだよ。芋煮会」

春奈、ため息。

春奈

「出たよ。陽介名物・ザルザル報連相。何にも用意してないよ？」

陽介

「どうしよう。芋煮、春奈に作ってもらうって言っちゃった……」

春奈

「えー？ もう……。じゃあ向こう着いたら、スーパー寄ってこ」

陽介

「ごめーん」

春奈

「……まあ、いいけど」と、呆れ顔。

日向、遊んでいた手を止める。

何か思うところがある様子。

3.

山形駅構内（昼）

「山形駅」の掲示。

陽介、電話に向かって、

陽介

「うん、今駅着いたとこ。え？」

4.

河川敷・芋煮会会場（昼）

淳の声「陽介、まだ来ねえの？ 二時に来るつつたろ」

土手のススキに、赤トンボ。

団体客で溢れる河川敷。

その一角、陽介の親族が陣取り、宴会中。約20人。

父・菅原淳（66）、出来上がっていて、

淳 「酒無くなりそうなんだよ。ビールでもなんでもいいから」

と、酒瓶を逆きに見る。

5. 山形駅構内（昼）

陽介 「（春奈に）ごめん、俺酒だけ先に買ってくわ」

春奈 「ええっ？」

陽介 「親父、新幹線の時間に向こう着くと思ってたみたいで」

春奈 「……いいけど」

と、不満げ。

陽介 「ごめん！」

と、ダッシュで駆け出す。

春奈、その背中を目で追う。

6. スーパーマーケット（昼）

春奈の押すカートが音を立てて動いている。

中には豚バラや里芋。

春奈、急いで買い物している。

日向、懸命に春奈のそばを歩きつつも、様々な食材

にきよろきよろと気を取られている。

春奈、商品を手に取る。味噌である。

それをカートに追加。

スーパーの一角。「秋はみんなで芋煮会」のポップ。

芋煮の写真。醤油ベースに牛肉の山形芋煮。

7. 土手（昼）

春奈、日向を連れ、重そうな買い物袋を両手に持って歩いている。

土手の下、大騒ぎする親族らと陽介。ため息。

8. 河川敷・芋煮会会場（昼）

淳 「陽介お前、ちゃんと春奈ちゃんの言う事聞いてつか？」

と、陽介をバンバン叩く。

陽介 「尻に敷かれっぱなしだよ。来る途中も怒らせちゃって」

と、ほろ酔いでヘラヘラ。

親族ら、大盛り上がり。

淳 「ごめん誰か、ビール持ってきてえー！」

と、大声で叫ぶ。

9. 河川敷・調理場（昼）

少し離れたところの簡易的な炊事場。

春奈 「あ、はーい！ ちょっと待っててくださいね……」

親族らが数人、忙しく動き回っている。

主に女性陣。みな雑談しつつも担当の料理を作るなどしており、周りのことはあまり気にかけていない。

その中に、陽介の兄・早乙女浩介（41）が混ざっている。

春奈、親族らから少し離れた位置で、大きな両手鍋を見ている。火に掛かっている。

たっぷり味噌を入れ、味見。よし、という顔。

10. 河川敷・川辺（昼）

日向、川に向かって水切りしている。

次の石を拾うも、飽きた様子。

手元の石を見つめる。先が少し尖っている。

しゃがんで傍の草葉を手に取り、石を包丁のように

使って切り始める。

陽介の声 「春奈、ビール！」

日向、声の方を振り返る。

春奈 「は、はーい！」

11. 河川敷・芋煮会会場（昼）

春奈、両手鍋をそーっと持ってくる。

陽介ら親族、鍋の登場に大盛り上がり。

淳 「おっ、来ました来ました、芋煮！」

陽介 「うわ懐かしい」

春奈、鍋をテーブルに置き、蓋を開ける。

一同、覗き込む。おおーっと、歓声。

が、何か気づいて、静まる。

中は味噌ベースの豚肉に里芋、野菜が入った汁。

淳 「春奈ちゃん、これ……」

春奈 「あ、お父さんビールね。今持ってくる」

親族ら、「味噌だ」など困惑の声がポツポツ。

酔った陽介、少し大きめの声で、

陽介 「春奈、なんで味噌汁作ってんの？」

春奈 「……は？」

春奈、陽介の様子に片眉を吊り上げる。

淳 「春奈ちゃん、味噌に豚って、豚汁じゃねえんだから」

と、笑い飛ばす。

春奈、はっと何かを察した様子。

陽介に向かって、

春奈 「ねえ、山形の芋煮って……」

陽介、ピンと来ていない。

いつの間にか合流していた浩介、なんとなく察して、

浩介 「あー！ ほら、春奈ちゃん宮城の人だから」

陽介 「はあ」

浩介 「宮城の芋煮って、味噌に豚なんだよ。だよね？」

春奈 「はい……」

親族ら、「あー」と合点のいった声。

陽介 「そういえば、前にそんな話したような……」

春奈 「うっかりしてた……。バタバタしちゃって」

と、何気なく口走る。

しかし陽介、若干むっとした様子で、

陽介 「山形の芋煮は、醤油に牛肉なの」

春奈 「……そうなんだ」

「味噌汁じゃあ、つまみには弱いよな」

と、笑う。

陽介、淳につられて思わず半笑いで、

陽介 「（親族らに）ごめんね、コイツ仙台様だから。山形のこ
となんて何も知らないのよ」

親族ら、大爆笑。

春奈 「……仙台様」

一同、静かになる。

陽介、はっとして慌てた様子で、

陽介 「いや、その……。自虐みたいなもんじゃん。こっちが田

舎だっていうさ」

春奈 「自虐……。？ 嫌味に聞こえたけど」

陽介、再びむっとして、

陽介 「……春奈の言い方だって嫌味っぽかったよ。なんていう

か、俺のせいでみたいな——」

春奈 「はあ？」

春奈、鍋の蓋を放り捨てる。

日向の手を取って、

春奈 「行くよ」

春奈、日向を連れ、立ち去る。

陽介 「え、春奈？」

12. 土手（昼）

春奈、日向を連れ、ズカズカと調理場の方へ向かう。
その顔、怒り心頭。

13. 河川敷・芋煮会会場（昼）

陽介、うなだれている。

淳 「確かに怒らせてんなー」

と、若干茶化したようなテンション。

淳 「たかだか芋煮で喧嘩してんじゃねーよ」

と、お酌を要求。

陽介、淳にお酌する。

二人のそばにいた浩介、調理場の方を見る。

春奈と日向が、炊事テーブルのイスに座っている。

河川敷・調理場（昼）

日向、傍で枝豆をぷちぷちと剥いている。

春奈、手にはビール。ほろ酔い。

春奈 「あー、もー、むかつくー」

浩介の声 「ほんと、ごめんねえ」

春奈、驚いて顔を上げる。浩介がやって来ている。

春奈 「いや別に、いいんですけど……」

浩介 「いやあ、良くないでしょ。うち男所帯だからさ、無神経でダメだよ。俺もよく和沙に怒られてるよ」

春奈 「お義姉さん、今日来なかったんだね」

浩介 「仕事がね」

と言いつつ、おもむろに里芋を剥き始める。

春奈 「え、まだ何か作るの？」

浩介 「まあ、ちよつと」

春奈 「いいなあ。お義兄さんは料理やってくれて」

浩介 「稼いでるのが向こうだからね。俺がやらないと」

日向、不意にイスから降りる。

浩介の隣に行き、

日向 「なんかやる」

浩介 「え？」

日向 「ご飯つくるの、やってみたい」

春奈、驚いた顔。

浩介、春奈を見る。春奈、戸惑いつつも頷く。

浩介、笑顔になり、

浩介 「じゃあ……。里芋剥いて貰おうかな。できるかな？」

日向、よく分からないなりに、こつくりと頷く。

浩介 「手が痒くなったら無理しないでね」

と、里芋と、丸めたアルミホイルを握らせる。

浩介 「こうやって……」

日向の手に自分の手を重ね、アルミホイルで里芋を

こすってみせる。

日向、里芋の皮を剥き始める。

春奈、それを見て笑顔になる。

× × ×

浩介 「はい、どうぞ」

と、取り分けた芋煮を日向に渡す。

日向、春奈の前に芋煮を持ってきて、

日向 「はい、どうぞ」

春奈 「ありがとう」

と嬉しそうに日向を見て、それから器を覗く。

中には、醤油に牛肉の山形芋煮。

春奈 「これが山形の芋煮？」

浩介 「そう。せめてものお詫び。あ、当てつけじゃないよ。こ

れで覚えろとか、そういうことじゃないから」

春奈 「分かってますって」

と笑い、恐る恐る一口食べる。

春奈 「……うつまあ」

春奈、どんどん食べる。

日向もイスに座り、食べ始める。

春奈の真似をして、

日向 「……うつまあ」

春奈 「なんか、すき焼きみたい。でも、里芋があるから牛の脂
がくどくない。同じ芋煮なのに、こんな違う？」

浩介 「でしょ？」

続いて牛肉を口に入れ、ビールで流し込む。

春奈 「……合う。合う！」

浩介 「良かった。日向も頑張ってくれたしね」

春奈、嬉しそうな、しかし複雑そうな顔をする。

春奈 「あの人にも、お義兄さんを見習ってほしいな」

浩介 「いや……。むしろ俺がこんなだから、陽介が気を張っち
やってる節もあると思うんだよな」

春奈 「えー、そう……？」

浩介 「長男の俺が、こんな感じだからさ。フワフワしてるって
いうか」

浩介、温かい視線で日向を見つめる。

浩介 「婿養子だしね、俺。まあ、そんなの言い訳にならないと
思うけど。ほんとは関係ないことだよな」

春奈、何かを考えているような渋い顔。

浩介 「……そういや、カレーとうどんもあるよ」

春奈 「え？」

浩介、レトルトカレーとうどんを見せる。

浩介 「シメはカレーうどんにすんのが山形流」

春奈 「……！」

春奈、残り少なくなった丼を、反射的に差し出す。

浩介、トロツとカレーをかけ、うどんを入れる。

浩介 「どうぞ」

春奈、ズズッと啜る。

春奈 「うっまあ」

と、手が止まらず、全て食べ尽くす。

春奈 「ご馳走様でした」

日向も手を合わせる。

浩介 「山形も意外といいでしょ？」

春奈 「うん！」

春奈、我に返って、

春奈 「あつ、でも……。それとこれとは、別というか――」

浩介 「あ、いや、分かってるよ。そういう意味じゃなくて――」

陽介の声「春奈ーっ」

一同、声の方に注目する。

陽介が小走りで近づいて来る。

陽介 「あ、食べてたんだ。良かった」

春奈 「お義兄さんが作ってくれた。日向も」

陽介 「日向も？ そっか……」

と、少し驚いた様子。

陽介 「春奈、ごめん」

と、頭を下げる。

陽介 「本当に、ごめん。俺も芋煮が違うこと、忘れてて……」

春奈 「そこじゃないから。芋煮で喧嘩したわけじゃないから」

陽介 「あ、でも。こっちもみんなで春奈の芋煮食べたんだよ」

春奈 「え？」

淳ら親族たち、宮城の芋煮に興味津々。
皆、笑顔で食べている。

淳 「たまにはこっちもいいなあ。な？」

陽介も、一口食べてみる。

そして、目を見張る。

16.

河川敷・調理場（昼）

陽介 「みんな、すげえうまいうまいって食ってる」

春奈 「……あなたは？」

陽介 「……めちゃくちゃ美味かったよ」

浩介、密かにうんうんと頷く。

陽介 「本当ごめん、全部押し付けちゃって。せっかく作ってくれたのに、皆の前でバカにしたみたいなこと言って」

春奈 「……はあ」

陽介 「とにかく、ごめん。だから、戻ってきて」

と、頭を下げる。

日向 「パパのご飯もたべたい」

陽介 「えっ？」

陽介と春奈、驚いて日向を見る。

日向 「パパのご飯」

陽介 「え、いや……。そうだなあ、今度なんか挑戦してみるか

……？」

と、困り笑い。

浩介 「教えてやるよ」

と、にやり。

日向 「ママのご飯もたべたい」

一同、顔を見合わせる。そして笑う。

浩介 「食べるの大好きなんだな」

春奈、笑いながら日向の頭を撫でる。

一つ、息を吐いて、

春奈 「まあ、いいけど」

西日が傾き始める中、一同が調理場から出る。

敦たちの元へ向かって、歩いていく。

（終わり）